

修士論文(要旨)
2014年1月

国内インターナショナルスクールで育つ日英バイリンガルのアイデンティティ

指導 佐々木倫子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
211J3008
熊本愛子

目次

第1章	はじめに	1
1.1	研究の背景	1
1.2	研究の目的	1
1.3	先行研究概観	2
1.4	用語の定義	3
1.5	インターナショナルスクールの概要	6
第2章	調査概要	9
2.1	日英バイリンガルの調査概要	9
2.2	母親の調査概要	12
2.3	分析方法	13
第3章	JF1 のケース	14
3.1	言語環境	14
3.2	言語力と言語の機能	16
3.3	JF1 のアイデンティティ	18
第4章	JF2 のケース	25
4.1	言語環境	25
4.2	言語力	26
4.3	JF2 のアイデンティティ	30
第5章	JM1 のケース	33
5.1	言語環境	33
5.2	言語力と言語意識	34
5.3	JM1 のアイデンティティ	38
第6章	JM2 のケース	42
6.1	言語環境	42
6.2	言語力と母語の認識	44
6.3	JM2 のアイデンティティ	46
第7章	まとめと今後の課題	51
7.1	日英バイリンガルの言語アイデンティティ	51
7.2	揺らぎのないアイデンティティ	53
7.3	今後の課題	54

謝辞

参考文献

巻末資料

近年のグローバル化とともに国際語としての英語に注目がおかれ、英語で授業を行っているインターナショナルスクール（以下、インター）の人気も高まっている。しかし、インターは単に語学を学ぶ場ではない。法的にインターは義務教育にあらず、カリキュラムは日本の公的教育と異なる。授業は英語で行われるが、英語を学ぶのではなく、英語で各教科を学ぶのである。こうした環境で学校生活を過ごす子どもがどのように育つのか、どのような社会的存在として成長するのかをしっかりと考える必要がある。

言語にはアイデンティティ機能がある。アイデンティティとは、自分や周りとの関係をどのように捉えているかである。日本人の子どもが日本語とともに英語を身に付けていくことはアイデンティティにも影響するといえる。これは稿者自身が日本国内のインターに幼稚園から高校卒業まで通った経験から感じることである。では、インターでどのようなアイデンティティが育つのか。本研究は、日本国内のインターで幼い頃から教育を受けた日本人の日英バイリンガルのケーススタディーを通し、彼らのアイデンティティを明らかにしていくことを目的とした。なお、アイデンティティは流動的なものであるため、今現在の彼らのアイデンティティを捉えることとした。

本研究の対象者は、日本人の両親を持ち、小学校から高校卒業まで日本国内のインターで教育を受けた日本国籍の成人日英バイリンガル4名である。全員日本語と英語の両方で高い言語力を有するバランス・バイリンガルである。インターの高校を卒業後は、日本国内もしくはアメリカの4年制大学を卒業し、就職している。全員が日本で仕事をした経験があり、現在は日本もしくはアメリカで生活をしている。調査方法は、まず調査協力者4名それぞれに半構造化インタビューを行い、その結果をもとに、座談会を行った。また、彼らの言語力を把握するための言語力自己評価調査も行い、さらに、4名の母親にも半構造化インタビューを通して家庭環境やインターに入学させた理由などについて尋ねた。

調査の結果、それぞれに様々なアイデンティティの特徴が見られた中、いくつかの共通点も示された。一つは、母語は日本語であり、自分自身を日本人だと認識しているが、英語も必要としている点である。その中で、“ちゃんぽん”とインター出身者同士で呼ばれる、コードミキシングの役割は大きい。インターに通った者同士にとって、ちゃんぽんで話すのは楽であり、両言語を使って表現できるため、最も的確に言いたいことを伝えられる話し方である。こういった母語の認識や言語使用は彼らのアイデンティティに影響している。彼らが母語は日本語だと言い、日本人であると話すのは、言語を通し日本人の社会グループを選択している姿だともいえる。そしてちゃんぽんは、ちゃんぽんが通じる者同士に連帯感や親しさを芽生えさせ、インター育ちだという仲間意識を表す、集団のアイデンティティに欠かせないものになっている。つまり、両言語の使用を求めている彼らの拠り所になっていると考えられる。

また、4名とも日本の公的教育を受けた日本人と相違点があると感じているが、アイデンティティには揺らぎが見られなかった。相違点としては、自己主張ができ、周りに流されにくいこと、インターらしい服装があること、教育内容や教授言語の違いから知識面で知らないことがあること、日本語が下手だと感じるなどなどがあげられた。日本語に関しては周りから冗談交じりにバカにされたり頭が悪いと思われるなど損をしたりもするという。こうした相違点は、自分は日本人ではないのかと、アイデンティティを揺らがせる可能性もある。しかし、本研究では違いをマイナスにとることなく、しっかりと揺らぎのないアイデンティティを確立している姿が見られた。揺らぎが見られなかった理由には、調

査協力者の高い言語力により，社会参加や社会生活に苦勞がないこと，また自己肯定感が高いことが考えられる。この4名のケースはインターで育った日英バイリンガルの非常に安定した姿を捉えた例だと言えるだろう。

本研究は調査協力者4名のアイデンティティを通時的に追究したものではない。彼らが現在のアイデンティティを確立するまで，育つ過程でアイデンティティに揺らぎがあった可能性や，今後の環境の変化などでアイデンティティが変化していくことが考えられる。今後は，通時的な調査や彼らの追跡調査をすることで，より深くインターで育つ日英バイリンガルのアイデンティティの把握ができるだろう。

参考文献

- 大原始子 (2004) 「アイデンティティの多層性と言語の選択・切り替え 「集団」, 「個」としてのシンガポール人」小野原信善・大原始子編著『ことばとアイデンティティ ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し』三元社, 99-126.
- 小野原信善 (2004) 「アイデンティティ試論 フィリピンの言語意識調査から」小野原信善・大原始子編著『ことばとアイデンティティ ことばの選択と使用を通して見る現代人の自分探し』三元社, 15-51.
- 小泉聡子 (2011) 「多言語話者の言語意識とアイデンティティ形成—「ありたい自分」として「自分を生きる」ための言語教育」細川英雄編者『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性』春風社, 138-158.
- 酒井陸三 (2003) 『インターナショナルスクールで学ぶ』学習研究社
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法 —原理・方法・実践—』新曜社
- 真田信治・ロング, ダニエル (1992) 「方言とアイデンティティ」『月刊言語』21 巻 10 号. 大修館書店, 72-79.
- 知念聖美 (2008) 「二言語で育つ子どものアイデンティティ」佐藤郡衛・片岡裕子編著『アメリカで育つ日本の子どもたち—バイリンガルの光と影』明石書店, 172-190.
- 中島和子 (1998) 『バイリンガル教育の方法 12 歳までに親と教師ができること』アルク
- 原裕視 (1995) 「異文化接触とアイデンティティ」『異文化間教育』9 号. 異文化間教育学会, 4-18.
- 増田ユリヤ (2005) 『家族で選ぶインターナショナルスクールガイド』講談社
- 箕浦康子 (1995) 「異文化接触の下でのアイデンティティ」『異文化間教育』9 号. 異文化間教育学会, 19-36.

- Kanno, Yasuko. (2003). *Negotiating Bilingual and Bicultural Identities: Japanese returnees betwixt two worlds*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Li, Wei. (2007) . Dimensions of bilingualism. In Li, Wei(ed.) *The Bilingualism Reader (Second Edition)*, Oxon, England: Routledge. 3-22.
- Norton, Bonny. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. Harlow, England: Pearson Education.

参考 URL

アジア人財資金構想 HP

<http://www.ajinzai-sc.jp/asia.html> (2013 年 10 月 28 日最終閲覧)

文部科学省「インターナショナルスクールとブラジル人学校の現状」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/011/attach/1319310.htm
(2013 年 12 月 13 日最終閲覧)

文部科学省「国際的な評価団体認定外国人学校一覧」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shikaku/07111314/006.htm (2013 年 10 月 13 日最終閲覧)